

平成 28 年度第 2 回看護学科セミナー実施報告 「カリキュラム学習会」

日時・場所：H29.3.21（火）9:30～12:30、 355 教室

参加者：看護学科 36 名、臨床検査学科 2 名聴講

目的：1) カリキュラム改正の経緯・意図と今後の方向性について共有する。

2) 本学科で育てたい卒業生像をイメージし、新カリキュラムへの夢を描く。

【報告】

1. カリキュラムとその構築プロセス—看護教育学の立場から：野本百合子教授

教育課程とは、学生たちが学校の教育目標に即して望ましい成長・発達（変化）を遂げるために必要な諸経験を彼らに提供する意図的、組織的な全体計画である。

教育目標とは、組織的な教育活動を通して、実現が望まれる成果、教育成果を評価する際の基準であり、教育を提供する側が教育を受ける側の中に実現しようとする価値を目的とする。

教育理念とは、ある組織における教育のあり方を根本から規定する教育目標の体系である。これは時代の影響を受け、社会の要請を背景とするが、時代を超えて普遍的な判断に基づく。

統合カリキュラムとは、学習者の人格と認識の統一的発達を求めて、知識や学科目の関連性・相関性を構造づけるカリキュラム形態である。統合カリキュラム構成には方向づけ段階→形成段階→機能段階→評価段階の 4 段階があり、繰り返されていく。方向づけの段階では教育理念の明確化・成文化→教育目的の明確化・設定→卒業生の特性の明確化・成文化を繰り返すらせん的明確化を行うことで第 1 の統合が行われる。さらに用語解の作成、理論的枠組みの作成で、内容の諸要素とカリキュラム軸を抽出する（第 2 の統合）。形成段階では、カリキュラムデザインの決定、レベル目標と学科目標の決定、内容配置図の作成を行っていく（第 3 の統合）。

2. 本学の現行カリキュラム<21・24 カリ>の特徴と課題：枝川千鶴子准教授

平成 24 年度カリキュラム改正の背景には、保健師助産師看護師法および看護師などの人材確保の促進に関する法律の一部改正、大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会報告、養成所指定規則の改正、大学としての助産師養成教育方針の変更、学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標が示されたことなどを説明された。

現行の学部カリキュラムの課題は、学生や教員のアンケート結果から、学生の主体的学習の推進、実践力の強化、科目開講時期の偏りの改善があげられるが、既に運営上、教務委員会レベルで平成 29 年度から改善されるものもあることが報告された。

3. 本学助産学専攻科のカリキュラムマップ：小嶋理恵子准教授

助産師の卒業時の到達目標を大項目・中項目・小項目に分け、それらの項目における厚労省の到達度と本学の到達度（厚労省との違い）を示し、その右側に本学の科目を列挙して、どの科目でどこまでの水準を担っているかが一覧でわかるように示している。実習が終わった段階で、学生が I～IV で自己評価を行い、全体の課題を抽出するようにしていることが説明された。

4. 文科省による医療人育成のモデル・コア・カリキュラム：野村美千江教授

文科省がこれまでどのような検討を重ねて学士課程における看護学教育を標準化できたのかを示し、平成 23 年の「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」最終報告、「到達目標 2011」と呼ばれる学士課程の人材養成の基盤内容を確認した。

医学教育モデル・コア・カリキュラムでは、多様なニーズに対応できる医師の養成が掲げられ、多様なニーズとは国際的な公衆衛生や医療制度の変遷を鑑み、国民から求められる倫理観、医療安全、チーム医療、地域包括ケアシステム、健康長寿社会などである。それら多様なニーズへの対応や OBE を共通して進めていくこと、実践的能力を明確にして客観的に評価・改善をサイクルさせていくこと、修得した知識や技能を統合化する医療人を育成することが示された。

モデル・コア・カリキュラムとは、各大学が策定する「カリキュラム」のうち全大学で共通して取り組むべき「コア」の部分抽出し、「モデル」として体系的に整理したものであり、6-7割の専門基礎・専門科目の教育内容が示される。医学教育とりわけ臨床実習は、今後、今まで以上に地域医療（地域完結・循環型医療）や地域包括ケアシステムを意識した内容になると予想され、看護も同様である。本学は県立大学としての使命を果たすべく教育課程を考える。

5. カリキュラム検討に関する意見交換

6 グループで意見交換後、全体共有の場で以下のような内容が共有された。

- ・卒業時の技術到達度に関し、どの領域でどのように達成していったのかが見えにくい。
- ・学生が出来ていることを学生に返していくことが大事、それが自己学習力を高めていく。
- ・実習現場が変化し経験できる技術には限界が多い。アセスメント力や予防を強化したい。
- ・求める看護師像や能力は、現場は適応力、教育現場は卒業時到達目標、学生自身は不明確。
- ・学生のレディネスが整わない時期に高度なものを実習先に求められる。
- ・電子カルテやクリニカルパスで、患者の個性がみえにくくなっている。アセスメント力の向上（病態・機能、生活者の視点、社会システム、家族も含めた視点）と統合力の強化が課題。
- ・学生のニーズに応え、一貫性のある授業展開が必要。ゼミの学びが継続して活かせる工夫を。
- ・学生の自主性を養い、根拠をもった考え方が出来るようにする。
- ・技術特論やポートフォリオなど本学の特徴を活かしていくとよい。
- ・先輩と後輩が触れ合える機会を増やし、後輩を育成できる力を持った人になってほしい。
- ・教員は、個人学習とグループ学習について教育方法の技術向上が必要。
- ・学生の主体性が乏しいのは、カリキュラムが過密かつ教員が関わりすぎるのも要因の一つだ。
- ・変化する社会情勢の中で基礎を身につけ、先を見据えて発展させられる学生を育成したい。
- ・倫理観、対象理解、対象へ接近する力に関しては育まれてきていると思う。
- ・人間力を高め、国際化に対応するためにも英語に触れあう時間が 4 年間を通じてあるとよい。

まとめ（岡田准教授）：期待する卒業生像・今後の課題などが共有できた。本日の内容を、カリキュラム検討ワーキングで活かしていく。引き続き、学科メンバー全員の協力をお願いしたい。

（司会進行：岡田ルリ子 書記：坂元勇太、伊藤美香）